シリーズ◎オセアニア物語(54)

奥地に手作りのゲストハウス

パプアニューギニア　フリの挑戦

東京大学大学院医学系研究科
人類生態学教室助手　梅 﨑 昌 裕

かつら、カラフルな化粧—男の正装

私が大学院学生の時から調査を継続しているタリ盆地は、パプアニューギニアのサザンハイランド州、標高1,600～2,000メートルの高原地帯に位置している。首都ポートモレスビーからは36人乗りの双発プロペラ飛行機に乗ってわずかに1時間30分。標高が高いために日中の最高気温が25度前後で、早朝は10度以下まで冷え込むことも珍しくない。ポートモレスビーの暑さを思えば天国のようにさわやかな高原リゾート気候の盆地だ。

このタリ盆地には、フリ語を話す人々が住んでいる。彼らは、お祭りの時に巨大な「かつら」をかぶり、黄色と赤を主体としたカラフルな化粧をすることで有名で、パプアニューギニアの紙幣にもその姿が印刷されているくらいだ。かつらには、2種類あって、両端が角のようにせりあがっているV字型はお祭りで踊るときなどにかぶる「正式な」かつらであり、笠型の方は普段のおしゃれとして使う「日常用」かつらなのだそうだ。これらのかつらは本物の髪の毛で作られているため、男がこのかつらを作るときには、奥さんや子供の髪の毛をも使うという。

笠型のかつらをおしゃれに使うと書いたが、このかつらをかぶり顔に化粧をして体中に装飾をつけたスタイルは、彼らの正装として今日でも通用している。タリの飛行場の周りには商店や市場などがあって、飛行機がポートモレスビーからくる日などには、多くの人々が近隣の村から集まってくる。そんな時には、多くの男がかつらの正装をして堂々と町を歩いているのをみることができる。また、国会議員選挙のキャンペーンポスターに、かつらをつけた「正装」の写真をのせている候補者が多いのには驚いた。

▲お祭りの様子。全員で跳びあがっている。

▲伝統的な正装をした人々。後ろには安置された頭蓋骨がみえる。

▲「日常用」かつらを後ろからみたところ。

手つかずの自然と文化体験ツアー

そんなタリ盆地には、「アンブアロッジ」という1泊シングル300米ドル以上という超高級リゾートホテルがある。ロッジからはタリ盆地が一望できる(らしい)。このロッジ

▲高台からみた村と湿地帯。

を利用する観光客のほとんどが外国人のパック旅行客であり、飛行場から予約してあった送迎車でロッジに直接向かいそこで数日間過ごしたあと、また飛行場まで車で送ってもらう。このロッジの売り物は、ゴージャスで快適なホテルに滞在しながら「パプアニューギニア奥地に残る手つかずの自然」と「きわめて興味深いフリの文化」に触れることができるということである。私がタリ盆地の村で暮らしていた家は高台にあったので、夜に外で小用を足しているとこのロッジの明かりが遠くにちらちら瞬くのがみえた。

このロッジは、売り物の1つである「フリの文化」を宿泊客にみせるために、タリ盆地のなかに「文化センター」のようなものを数ヵ所持っている。たまたま、私の住んでいた村のそばにもそういう場所があった。

伝統的なフリの社会では、人が死ぬと高い4本ポストの上に小屋をつくってそこに死体を放置し、最終的に骨だけを特別の石灰岩の洞窟に持っていって安置するというようなことを行っていたらしい。また、男性の成人式儀礼として、女性の目に触れることがないように特別な森の家にこもり、そこで特別な水を頭にかけて髪を伸ばすということも行われていたという。

彼らがこのような埋葬方法・儀礼を放棄してから久しいが、観光用につくられた「文化センター」には、死体を置く小屋やペインティングされた頭蓋骨、頭にかける水の湧く泉などが展示されている。観光客は、文化体験ツアーと称して日本円にして5,000円以上をロッジに払い、このような「文化センター」に連れられてくる。そして、展事物をみたりその説明を聞いたりするほかに、もし余分にお金を払えば、V字型のかつらをかぶって正装した男たちの踊りをみることもできる(お金をたくさん払うほど踊る男の数が多くなる)。

文化センターには常に人がいるわけではなく、観光客が集まる日になると近くの村から人が集められるのが普通であり、私の住んでいた村の男も、「今日は仕事だ、ちょっといってくる」という感じで「文化センター」に出勤したりしていた。しかし、ロッジから1人1人の村人に払われるお金は1日でせいぜい500円くらいのもので、観光客がツアー代金としてロッジに払っている額にくらべれば微々たるものである。

▲お祭りで、V字型の「かつら」をかぶった男たち。

散乱する頭蓋骨、驚く本物の迫力

私の住んでいた村は、タガリ川の流域に発達した湿地帯にあり、村からは、遠くまで広がる緑の湿地帯の真ん中を川がゆったりと流れる様子が眺められる。また、村の北側にある石灰岩の急峻な山地には無数の鍾乳洞が発達している。そのうちの1つは、山の南側から北側へぬける長さ約100メートルのトンネルで、懐中電灯を頼りにその洞窟を抜けることができる。トンネルの中央部では真っ暗になり、コウモリが頭の上を飛んで、

▲向こう側にぬける鍾乳洞の入り口。

ちょっとした探検隊の気分を味わえる。そして、洞窟を抜けたむこうには幅が広く湖のようになった川が広がり、先祖が戦争を前にブタを殺して祈った場所、先祖が頭蓋骨を安置した鍾乳洞などが次々にあらわれる。特に、頭蓋骨の鍾乳洞に入ると、そこらじゅうに骨が散乱していて、あるものは小さい子供の骨であり、あるものは歯のない頭蓋骨であったりして、「文化センター」のディスプレイとは比べものにならない迫力だ。

私がこの村で調査を始めたのは1993年である。そのころ人々はこんなに魅力的な自分たちの村にゲストハウスをつくって金儲けができないかという話をしていた。確かにロッジの文化体験ツアーに比べれば、この村は景色も洞窟も数段すばらしい。しかし、村人はゲストハウスの運営に関して全くの素人であり、その頃は私もあまり本気にはしていなかった。

▲村のゲストハウス。左が宿泊棟で、右が料理棟。

売り物になるかムームー料理

ところが1997年に状況が一変した。タリ盆地全体でゲストハウスをつくるのが一種のブームになったのである。ひとつにはタリ盆地出身の州知事が当選し（元総理大臣秘書だったという男でタリの人々の期待は大きい）、彼が施政方針演説で「タリに新国際空港を建設し、国際観光都市をめざそう。皆もゲストハウスをつくって観光で金儲けをしよう」というようなことをいったものだから、「それなら、ひとつやってみようではないか」ということになったらしい。また、外国資本の「アンブアロッジ」が自分たちのフリ文化を観光客にみせて利益をあげているということに対する反発も人々が共有していた背景の1つだと思う。

▲ムームーで、焼いた石の上に、豚やサツマイモをならべたところ。

私がお世話になっている村の人々も、ここぞとばかりゲストハウス建設を計画し、州の地域振興基金からの融資も取り付けた。最初の案では、プレハブの住宅を建て、発電器や太陽熱温水器を買い、プールさえも掘ることになっていたが、さすがに先行投資が大きくなりすぎるということで、まずは村で自分たちが住んでいるような茅葺き屋根のゲストハウスを建てて地道に始めることにしたという。私もいろいろと協力を求められたが、彼らが作った手書きのパンフレットをワープロで打ち直した以外はなるべく口出ししないようにしていた。それでも、話をきくたびにどうなることやらと心配だった。

結局、村人は2軒の大きな家を建てた。1つは宿泊棟でもう1つは料理棟である。宿泊棟は6ベッドルームで、1部屋2名寝られるから最大定員12名のゲストハウスだ。ただ、ベッドがないから寝袋が必要だし、ベッドルー

▲村のそばを流れるタガリ川。

ムといってもなかは2畳ほどの狭さである。

彼らのゲストハウスでは、夕食にムームーと呼ばれる石焼オーブンで調理した料理を出すのが売りである。

このムームーでは、まず真っ赤に焼いた石を地面に掘った穴に敷き詰める。その上にシダやバナナの葉を敷き、その上にサツマイモなどの材料を置いて、さらにそれをバナナの葉などで覆って蒸し焼きにする。ムームーで料理したサツマイモのうまさは格別で、また調理の過程もおもしろいから観光客はかなり喜ぶに違いない。体を洗うのは近くの川、トイレは宿泊棟から20メートルほど離してつくってある囲い付きの穴、1泊2食付きで約1,500円にするという。客はくるだろうか。

1週間に2～3人のゲスト

ゲストハウスはできたが、問題はどうやって客を連れて来るかである。パプアニューギニアは全体的に治安に少々問題があるという評判もあることだし、なかなか大変だろう。村人たちは空港に出かけていって旅行者に直接声をかけることにした。タリ盆地にたまにやってくるバックパッカーをつかまえようというのである。イスラエル人の兵役を終えたばかりの若者の間ではパプアニューギニア旅行がちょっとしたブームになっているという。

▲タリの飛行場に集まり、首都から到着した飛行機のタラップをみつめる人々。

そしてある日、初めての客がゲストハウスにやってきた。オーストリア人2名とイスラエル人2名のバックパッカーで、村にきて建物をみたときなはこれがゲストハウスかと驚いたそうだが、100メートルの鍾乳洞トンネルや骨の散らばる鍾乳洞を案内するうちにえらく喜んでくれたと、村人たちも興奮気味であった。その後も、1週間に2、3人の割合で旅行者がやってくるのには私も驚いた。バックパッカー同士の口コミで情報が伝わるらしい。

課題多い手作りのゲストハウス

現在、タリ盆地では人口増加の影響で土地や食料が不足し深刻な問題になっている。コーヒーなどの換金作物を栽培してもたいした収入にはならないし、雇用の機会は皆無に近い。そんな状況でこそ、ゲストハウスをつくって金儲けをしようというアイデアに、人々は大きな期待をかけたのだろう。それでも、現実はやはり厳しいもので、ゲストハウスをつくってから数か月の間に、無礼な観光客がきて村人を怒らせたこともあったし、売り上げの分配をめぐって村人同士で争いになったこともあった。宿泊客同士が喧嘩をしたことさえあった。いろいろなことが起るものだと思う。それでも、村人がそのような経験をつんで試行錯誤をしながらもゲストハウスの運営を続けていけば、それはまさに手作りの文化センターになっていくだろう。

私としては、皆さんも一度いらしてはいかがですか？といいたいところだが、ゲストハウスが存在するかどうか事前の確認が絶対に必要である。また、今のところロッジには電話・ファックス・私書箱などの通信手段はない。

写真協力：山内太郎・夏原和美（東京大学大学院・医学系研究課・人類生態学教室）